

九州文学紀行

萬田 務

Aさま

あなたにすすめられるままに九州文学旅行に参加しました。まず第一日目を汽車の中で過ごし、第二日目は虹の松原、鏡山、近松寺、舞鶴城跡を見学したのですが、鏡山から下界（？）を見下した風景は都会の騒音の中で生活していらっしやるあなたには想像もつきません。特に松浦佐用姫と大伴狭手彦の領布振りのロマンスで有名なこの領布振山よりの眺望を私が書くより、蒲原有明の「松浦あがた」の一節を引用する方が適切かと思えます。「雲と溝とのあひ接り、風は霧のごとく、潮は烟に似たる間を分けわけ船の帆影は、さながら空なる星かと思まがふばかり」と、また虹の松原についても「さながら夢幻の境のごときもの、これ虹の松原」と書いていますように、八軒も続く松原のアーチをくぐりぬけて行く私たちの乗ったバスを外から見ればきつとロマンティックでしょうね。夢幻の境から出たバスは唐津市内へと入ってきました。近松寺・舞鶴城跡を経て東唐津駅に向かう頃

は先程から降ったり止んだりしていた雨がいつのまにか本降りになっていました。それでも私には「雨」と「唐津」がマッチしているように思われ、ひとりで悦に浸っていました。東唐津駅から長崎駅まで三度位乗りかえたでしょうか。とにかく長崎に着きました。午前は古典の世界にひたつた私たちは、午後は急変して、長崎という異国情緒豊かな街を見学したのでした。まず長崎といえはあの有名な歌劇「お蝶夫人」を思い出すのですが、長崎市では「お蝶夫人」のふさわしい場所としてグラバー邸を選んでいます。グラバー邸は大浦天主堂の前を通り、オランダ坂を登りつめたところにあります。オランダ坂は天気の良い日より雨の日がよいとバスガイドが教えてくれました。何故かって？ それはあの石畳が雨にぬれ、緑青色に変り物影を映すかららしいのです。グラバー邸といえは与謝野寛が「長崎の円き港の青き水ナポリを見たる眼にも美し」と歌つたようにグラバー邸からの港の眺めは「東洋のナポリ」の名をほしきまにしています。このような異国情緒豊かな長崎に憧れて、明治末年には多くの作家が訪れていますね。否、日本の作家だけでなく、

ゴンチャロフ、ピエール・ロチ、それに「お蝶夫人」の原作者も異国人じゃありませんか。それにこの土地出身の作家が案外多いのです。広津柳浪・山本健吉・福田清人・田中千禾夫・井上光晴・佐多稲子等と。いまさらのように「文学と長崎」ということを再認識させられました。きょうは三日目です。「東屋」旅館をおわただしく苑ち、柳河に着いたのは正午前でした。柳河といえは水郷です。古い武家屋敷や商家の白壁が並び、柳の枝が水面に垂れていて美しいことは美しいのですが、溝渠の悪臭には少なからず参ってしまいました。白秋の生家は、柳河を南に二軒ほどへだてた六騎の街沖の端にあり、白秋生前の時は造酒屋を営む通称酒屋と呼ばれていたそうですが、いま、その面影は微塵も感じられなく佃煮工場と化していました。それでも私は白秋の匂いを少しでもかぎだそうとして、佃煮工場の中のぞいたり、案内者の説明に耳をかたむけたりしました。大火から焼け残ったという母屋の横を通り白秋の母校、沖の端小学校の隣地に建立されている「帰去来」の詩碑を見つけたとき、私はやっと白秋らしきものを見た

したような気になったのです。が、それもつかのま、またもあわただしく発たねばならなかったのです。

熊本の見学で印象に残つたのは、あの荒れに荒れた「大江義塾跡」でした。徳富兄弟が居た頃の義塾のあとかたもなく、面影をとどめているのは「恐ろしき一夜」にでてくる母屋と雑草の生い茂った広い庭だけでした。けれどこの面影もいまのまま放っておくとやがては消え去るのではないでしょうか。これに比べると同じ熊本市内ではラフカディオ・ハーンに住居は建物も新らしく、庭も立派でみことな石が沢山あり、このようなのを雲泥の差というのでしょうか。それでも八雲は熊本より松江の方が好きだったらしいのです。八雲は友人に宛てた手紙に松江よりも朝晩の冷えること、また人情も松江ほどこまやかでなかったというを書いています。夏目漱石は熊本に在る間は五回も転宅しているらしく、バスガイドも二、三しか知らず、それも素通りしました。でもその晩は内牧温泉の「山王閣」で「夏目漱石先生二百十日起稿の愛室」と木札を掲げられている部屋で雄大な阿蘇山と壁にかけられた蘇峰と漱石の写真に

見守られながら北九州文学旅行の最後の夢路をたどりました。本当に有意義な旅行でした。この旅行に参加することをすすめて下さったあなたに感謝せねばなりません。

立命館大学日本文学会清規抄

- 一、本会は立命館大学日本文学会という。
- 一、本会は日本文学の研究を推進すると共に会員相互の親睦を図る事を目的とする。
- 一、本会は機関紙「論究日本文学」を刊行し、研究会・講演会を開催する他、事業を行う。
- 一、本会の会員は普通会员、準会員、賛助会員とする。
- 一、普通会员は立命館大学日文学専攻の教員、卒業生、在学生とする。
- 一、本会に役員として、会長一名、評議員若干名を置く。
- 一、会員は総会を形成し、会則の変更その他の大綱は総会に於てこれを決する。
- 一、本会の経費は会費その他の収入による。

定価百二十円

昭和三十七年十一月二十日印刷
昭和三十七年十一月二十五日発行

編集兼 立命館大学日本文学会

発行者 森 本 修

印刷所 京都市下京区七条
御所ノ内中町五〇

中 村 勝 治

発行所 京都市上京区河原町通
広小路西入ル

立命館大学日本文学会

会本会への入会申込・会費の払込はすべて左記へお願い致します。

入会金 五拾円

会費 一年四百円(四回分納も可)

京都市西陣局区

内河原町通広小路西入ル

立命館大学文学部内

立命館大学日本文学会

振替 京都三三八三番